

炎天河

- ENTENKA -

題字 大東守

写真と文 池内文藏



第十話 久子

二頭の馬を曳ひいて、多聞丸たもんまるが厩うまやから出て来た。

甘南備かんなびの郷まで荷を背負きう雉丸きしまるへのかれなりの気遣いなのだが、曳ひき出して来たのは多聞丸の栗毛と、かれの父でいま鎌倉にいる正遠まさとおが地域巡視まきとろいに用いる黒馬だった。

「しばらく留守なんだし」と騎乗を勧める多聞丸に全身で拒む雉丸。結局、多聞丸が黒馬に乗り、雉丸は多聞丸の栗毛に跨またがった。つい一年ほど前までは轡くつわを取ろうとする雉丸の腕を強引に引き上げ、二人乗りしたものだ、ふたりとも成長著しく、無理になった。

城門を出て、棚田を眼下に坂道を下る。稲刈り作業中の老夫婦が手を振ると、それに応えながら「この景色はずっとこのまんまなんだろうなあ」と多聞丸が呟つぶいた。

目的地の甘南備は、多聞丸が留守居を務める赤阪城(後の下赤阪城)と観心寺かんしんじの中間点に位置する。きょうは、その地の前領主の一周忌の弔問で、雉丸の背には京にいる多聞丸の異母兄・弥四郎俊親としかかが船便で送って来た贈物が満載され、カタカタと音がするのは、新領主の年の離れた妹に贈るままごと道具らしい。甘南備を領する南江氏みなみえは、楠木氏が観心寺莊に来るはるか前

からの在地豪族で、藤原北家の流れをくみ、代々「備前守」を称し、地頭職として赴任して以来の心強い与力となっている。さきの備前守が没した時、正遠はその死を幕府に届けず、多聞丸たちと共に観心寺で寄宿生活を送っていた嫡男・藤五郎を赤阪城に呼び、自ら烏帽子親となつて元服させ当主に据えた。藤五郎は正遠の偏諱を受けて南江備前守正忠と名乗り「正式」に父の死を公開。それから一年が経った。

郷近くの高野街道で、先に弔問を終えた一団がみえた。先頭の男の顔をみた雉丸が慌てて下馬しようとする、男がカツカツと馬を進め雉丸の下馬を制した。かれは玉櫛莊を含む大江御厨を領し、水軍「水走党」を率いる水走左馬允康政であり、楠木氏傘下では泉州の和田党と並ぶ勢力を誇る。兜蟹を連想させる厳つい髭面の中央に不釣り合いな笑みをたたえるこの男の家系は、かつて八幡太郎義家の旗下で前九年の役・後三年の役を戦った畿内屈指の武闘派であるとともに河内の国の一之宮である枚岡神社の宮司を世襲。喜怒哀楽の全てが笑顔の理由を代々受け継いで来た正月の伝統行事「お笑い神事」で笑い続けているうちに「この顔になった」と初対面の人物らの緊張を解す時などに用いるのだが、きょうは心なしか哀しそうに見受けられた。馬を寄せて「いかがなされた」と問う多聞丸に「備前の姫にふられてのう」と康政は肩を落とすが、背後でかれの郎党らが必死に笑いを堪えている。―さもありません―の視線を送る多聞丸に言葉を発することが出来ない雉丸が頷き返すと、多聞丸は「叔父御、来月も足労掛けてすまぬ」と話題を変えた。すると、沈みかけていた康政の容貌が一瞬で明るくなり「なんのなんの、若君の晴れの日じゃ、水走党一同打ち揃って赤阪に参上いたす」と胸板を叩いた。実際は、大江御厨を巡って敵対する八尾氏などへの備えに半分は残して来なくてはいけないのだが、それでも二百人はいるだろう。康政が「笑顔」のまま

―喜里殿にみせてやりたかったなあ―

と悲嘆を込めた声で康政が天を仰ぐ。―喜里(きり)―とは、多聞丸の亡き母の名前だ。康政とは従兄妹同士で、正遠が玉櫛に池島館を建てた際、楠木氏に嫁いだ。美人で気立てのよい女性だったが、幾度かの流産を経て多聞丸を懐妊した時「今度こそは強い男児を」と、信貴山の毘沙門堂に日参した。そしてやっと授かった男児の名を正遠にねだって「多聞丸」と命名して

もらった。仏法を守護する四天王のうち北方を守護する毘沙門天の別名「多聞天」。喜里は多聞丸を生んだ三年後に女兒を生み、その産後の肥立ちが悪く没した。その女兒も五歳の時水難事故で行方不明のまままだ。

康政らと別れてほどなく南江の館がみえてきた。濠をめぐらせた堅牢な平城で、敵が押し寄せた際には赤阪城の前衛基地のひとつと想定されている。櫓門をくぐると、藤五郎改め正忠が幾分緊張気味に先客を見送りに出っていた。先客は多聞丸たちに深々と立烏帽子を垂れ、門を出た。上品な香が鼻腔を掠める。多聞丸たちを奥へと誘いながら正忠が「平野将監どのでござる」と先客の名を明かした。持明院統の公家・西園寺家の家人とのことだが、都のことはさっぱり分らない。が、将監が楠木氏・水走氏と敵対する八尾氏の婿であることに正忠は警戒しているようだった。「心配無用じゃ」と笑う多聞丸。主殿に通された雉丸らの前に侍女らが冷えた柿を出した。この辺りの甘柿は絶品で、甘南備の「甘」は甘柿に由来するという一説もある。

多聞丸の前に甘柿を差し出した五歳前後とみられる女兒が「若君さま、ごゆっくり」と小さな声で挨拶し、立ち去った。正忠がすまなさそうに「妹でござる。私が生まれてから久しぶりに生まれた子なのでー久子(ひさこ)ーと申す。生まれてすぐに母を亡くし、目に入れても痛くないほどかわいがっていた親父が死んでから、笑顔が無くなりもうしてな…」

久子は、彼女が生まれた時に両親が植えた柿の木が、父の死以来成長しなくなっている事に小さな胸を痛めているようだった。それを聞いた先客の平野将監が「八尾にござれば、ウグイスが飛来して唄いもうす」と水の恵み豊かな八尾への移植を提案すると、鉢合せた水走康政が「枚岡ならば、笑い神事で花盛り」と例の「笑顔」で久子に迫った。彼女はこれに引いた。

柿の食べ過ぎで同時に便意をもよおした三人は厠の帰りに庭の柿の木の前でたたずむ久子を見た。正忠が呼び掛けたが反応が無い。庭に降りた多聞丸がゆっくりと歩み寄り、久子と同じ目の高さで柿の木を眺める。久子が何かを尋ね、しばらく考えた多聞丸が両腕で空を仰ぐ。

同じ空を見上げた久子の横顔に白い歯がこぼれると、隣にいた正忠がーあの柿はいずれ城の庭にーと呟きながら小さく頷いた。立ち上がり久子の頭に掌を乗せる多聞丸と、はにかむような瞳で振り返る久子の姿に、雉丸は忘れ得ぬ「遠い日」を思い出し、口唇を嚙んだ。